

## 集合住宅における共有空間

垂水 百合子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和16年、兵庫県水上郡生まれ  
大阪市立大学住居学科卒業後、神戸市に勤務。住宅局で主に教育施設、公共住宅の設計にたずさわ  
り現在に至る。

趣味、映画をみること、街や建物をみて歩くこと。

私は、ここ数年来より公共住宅の設計の仕事にたずさわっている。公営住宅という種々の制約の中で、常に、少しでもよりよい集合住宅をつくりたいという思いを抱きながら悪戦苦闘している毎日である。

ここでは、よりよい集合住宅をという視点から、集合住宅の共有空間とコミュニティについて、最近の雑感をまとめてみようと思う。

この10年から15年にかけて、量から質への時代転換を背景に、集合住宅づくりにおいても、住戸規模の拡大、多様な住戸プラン、変化に富む外観や屋外空間づくりなど、従来の画一化、均一化を克服する質的改善が図られるようになった。住まいにも豊かさが求められる時代である。

**集合のよさ** ところで、最近の分譲集合住宅を見ると庭付戸建住宅のよさをとり込む傾向が非常に強い。限りなく戸建住宅に近づけることが集合住宅のあるべき姿なのだろうか。それは大いに疑問に思われる。なぜなら結局集合住宅は戸建住宅の代替物でしかなく、戸建住宅以上のものになりえないということになるからである。集合住宅には、集合住宅にしかないよさ、集まって住むことによって得られる楽しさ、快適さ、いわば集合することによってしか得られないコミュニティ環境の質をこそ追求すべきであろう。一般に、人間関係のよさは住みよさの重要な要素である。住む人を特定できるコーポラティブ住宅は別にして、多くの場合集合住宅では、入居して

初めて隣人としてのつき合いが始まるため、定住できるかどうかは、いかに良好な人間関係をつくりはぐくんでいけるかにかかっている。ここに、建築的にいえばコミュニティを促す装置やしかけが必要となってくる。

**長屋の露地** 集合住宅のコミュニティのあり方を考える時、しばしば下町長屋の露地の例がひきあいに出される。家々に囲まれた狭い露地空間は、人の通る道であると共に、子供の遊び場や立ち話の場、夕涼み、日なたぼっこの場として活用され、近隣の人と人をつなぐ共有の空間であった。このようににぎわいのある共有空間こそ、集合住宅のコミュニティの場として求められるものであろう。しかし長屋と露地の関係をそのまま今の集合住宅に当てはめることはできない。長屋も一種の集合住宅といえるが、1戸の住宅が非常に狭く貧しいために、住宅の中の生活が外部へあふれ出した結果の内と外とが渾然一体となった住まい方であった。当然、住戸は開放的でプライバシーのない生活環境であり、それを認



本多間第4住宅の集会所



狩口住宅の辻コーナー



重池第2住宅 住棟へのアクセス

めた上での生活があった。

**プライバシーとコミュニティ** ところが、現在の生活水準ではプライバシーのない生活はおよそ考えられない。むしろ、健全な人間関係を保持するためには個の確立が前提条件となるように、健全なコミュニティをつくるには、プライバシーの確保が不可欠とされる。集合住宅の計画では、このプライバシーとコミュニティの問題は早くから論じられてきたが、実際には、プライバシーは狭い住戸を壁と鉄の扉で区画することにより、またコミュニティは住棟間のオープンスペースで確保するという形式的な手法によって、住宅がつくられてきた。鉄の扉1枚で各住戸が共用の廊下や階段に接している従来の住戸のあり方は、常に扉や窓を閉ざしていないとプライバシーが守れないと同時に、共用の廊下や階段は、住戸から閉ざされて単に通行するだけのつまらない共用空間でしかない。やはり集合して住む以上、もう少し内と外とのつながりをゆるやかに保ちつつ、プライバシーを守りながら、住戸は外に向かって開いたものでありたい。

**中間領域** 住戸の周囲に、つまり玄関と共用の廊下や階段の間に緩衝空間があれば心理的には大きく違ってくる。いわゆる「中間領域」と呼ばれる概念で、最近の住宅づくり街づくりのキーワードである。集合の中であって、人は自分の住戸を中心としてその周辺に何となく自分の支配下にあると感じられる場を持つ。さらに、近隣の人々と共有してい

ると感ずる範囲をも持つ。これらの領域が中間領域と呼ばれる。公と私の中間でセミプライベートな玄関まわり、セミパブリックな廊下や階段、エレベーターホール、さらには、住棟へのアクセス、コモンスペースなどである。このような場にこそ、領域の共有意識や帰属意識を育て、愛着心を抱かせる空間的な装置やしかけを用意すべきであろう。セミプライベートな玄関まわりには、ポーチや一定の緩衝空間を設けて、植木鉢を飾れるなど居住者の個性を表現できる場を用意したい。

**豊かな共有空間を** 最近知る機会のあったリビングアクセスの事例では、居間を廊下に面して計画し、内と外との視覚的連続性が居住者の行動を廊下へ拡がりやすくし、共用廊下の界索性づくりに成功している。このような成功例はまだそんなに多くない。私自身の設計経験から実感するのは、魅力的な空間づくりの難しさである。なぜかよそよそしい広場、誰も座らないベンチや使われない砂場など、設計者の意図に反して失敗した例も数多い。共有空間が人々を無意識のうちに立ち止まらせ、心をなごませる空間であるなら、自ずと人々は集い語らうであろう。そして住空間を包み込む視覚イメージが豊かなものとして居住者各自の間で共有されれば、自分達の住む場所への帰属意識を高め、コミュニティをはぐくむであろう。そのような豊かで魅力的な共有空間を数多くつくることが住みよい集合住宅づくりへつながる道であると思う。

## 椅子

長瀬 真理子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

大学を出て、村野・森建築事務所に勤めて、15年をすぎました。長くいすぎた感もありますが……。随分優雅な仕事の話を書きましたが、これは、仕事の内の、ほんの1%程度のもので、他は……としておきます。

事務所に、特別椅子の依頼がきた。京都のMホテルの、超VIP用の椅子とのこと。

二週間程して、K先生が、スケッチを、K百貨店装工部に、渡される。

椅子を製作するF木工所に、スケッチは渡され、原寸図ができてきたが、K先生のスケッチを見慣れない人には、むずかしかったようだ。随分違ったものが、できてきた。

スケッチを、清書して、1/10の図面をかく。K先生に見てもらい、修正したものを渡す。

二週間程して、原寸図が、直ってきた。1/10の図面と並べて見る。寸法のチェックをし、気がついたところを、鉛筆で直して、K先生に見せる。

背のデザインが、少し変わる。1/10に描ききれない細部のデザインが、出てくる。肘の断面の凹凸、脚と座の、台輪の曲線、縞形、背の木部の、細い筋の幅、位置など。

再度、原寸図を、直してもらう。曲線が多いため、平面、立面、側面を一つにかいた図では、見にくいので、色分けをしてもらうよう、との伝言を伝える。

今度は、新しく、別々にかいた原寸図が、できてきた。又、二、三箇所、K先生の手が、入れられる。「まだ、気になるところは、あるけれど、一応これで、試作を作ってください。」随分むずかしい椅子なので、試作の製作には、一ヶ月程かかるとのこと。

図面が進む間に、椅子に貼る裂地の見本が、T織物から、取り寄せられる。七宝や唐草の、

込み入った模様の、モケット地。

木部は、サクラの、漂白したものの見本が、依頼されるが、後に、裂地が決った時に、少し色を付けたものとなった。

予定を少し遅れて、(やはり、木部の細工に、時間が、かかったそうだ。)職人さんも、つき添って、試作が、事務所に、届けられた。

K先生は、しばらく、無言のまま、正面、横、後から、近寄って少し倒したり、少し離れて、見たり、今度は、座って、座り具合、背の感触、肘をにぎっての手ざわりを、確かめられる。それから、直す箇所の指示が、続けてでる。「ここ(肘の背付部分)を、少しなだらかに削って、ここ(肘先)は、内側に少し傾斜するようにそいで、ここ(背の笠木)は、角を落して、なだらかな曲線にして……。」

床に布地が広げられ、その上で、椅子の左側だけを、職人さんが、指示通りに削る。手のひらに隠れる、小さなカンナで削られた椅子は、肘の、きれいな浅い縞形が、なくなり、背に、平行に入れられた筋は、微妙にずれる。少し離れて、左右の形を、比べると、その差は、はっきりわかる。

K先生の注視と、その後の指示、削りのくり返しが、小一時間程。最後に、座の奥行が、図面より短いので、直すこと、脚の貫の形を、挽き物でなく、板状のものにしたいので、その原寸図をかくことを、指示される。

裂地は、青の七宝模様のものが、よいとのことで、見本の裂地の切れ端を、椅子に、貼

り付けて、施主に見せることになる。

二日程して、装工部の人、施主に見せた結果報告にきた。いろいろ希望が、出たようだ。試作が、また、前に置かれる。「あちらの希望も、十分聞いてあげたいが、そうもいかないこともあって……。」

これまでの寸法変更を、完全に、試作に反映して、再度、施主に見せることになる。

ここで、これまで、一応、椅子として使える丈夫さを、持っていた試作も、座と背の傾斜と、座の高さのために、脚が、座の奥行を延ばすために、台輪を、切り継ぎされ、構造的にはもたない、椅子となる。

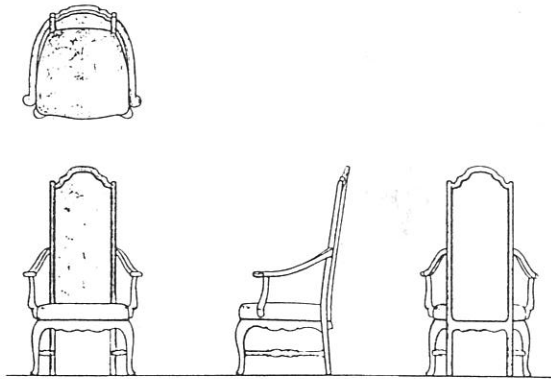
数日後、裂地を、青から茶に、変更すると、K先生が言われる。「これは、譲れない」事項だが、施主の希望に、折れた、といった感じだ。それとともに、背の曲線、肘の形など、先日の指示が、完全に、試作に、反映されているか、確認するよう言われる。また、提出された貫の原寸が、気にいらず、自ら原寸図の上に、和紙を広げて、スケッチされる。

一ヶ月後、直った試作に、これまでよりも細かい箇所の、指示が出る。

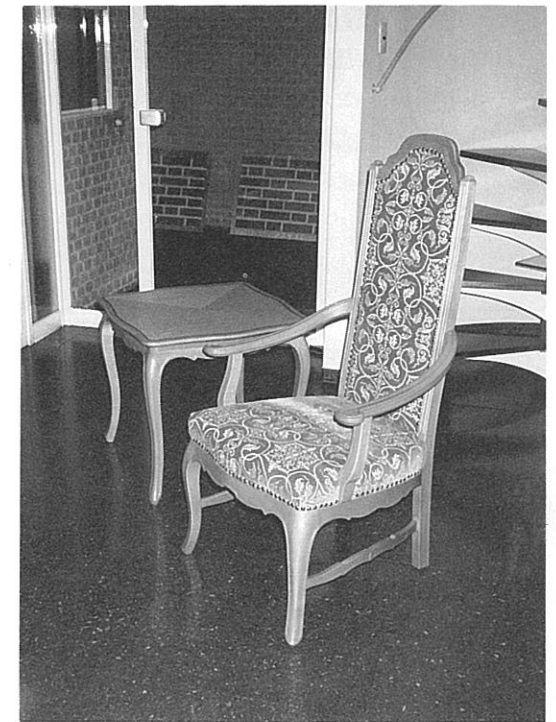
数日後、施主に見せ、形、裂地の色とも、了解されたこと、希望が、十分になえられたことに関しての、感謝の言葉も、伝えられた。

あとは、木地の色が、決定すれば、できあがり、待つだけだ。

できあがったら、必ず、ホテルに渡す前に、見せてくれるよう、装工部の人に頼む。「写真を、撮りたいから……。」写真も、さることながら、本当は、一度、座ってみたい気が、あるのだ。ホテルに納まったら、絶対に、座れない椅子、なのだから……。



1/10の図面の縮小



完成写真

## 私と仕事場

デュルト・森本 康代  
(賛助会員)

### 執筆者のプロフィール

昭和18年12月1日、中国長春市に生まれる  
京都市立美術大学西洋画科卒業  
京都大学工学部建築系教室増田研究室研究生を経て、ベルギー国立建築視覚芸術大学へベルギー政府奨学金留学生で3年間留学  
アトリエステンドグラスを設立制作開始

二階のデザイン室に座ると、まるで海に浮かぶ船の中にいるような感じです。東と南の二つの大きな窓からは、海と空とそこを横切る船だけが目に入ります。ここで私はステンドグラスのデザインを考えます。絵を画きます。色を塗ります。ここは、私の仕事場であり、一日の大半をここで過ごします。贅沢といえそうですが、仕事場はこうあるべきだという私の夢が、叶ったのです。南面は、塩屋海岸から JR、国道、山陽電車と続き、いきなり急な傾斜面に入ったそこであり、県の急傾斜崩壊危険区域の指定を受け防災工事をしてあります。絶壁の上です。そこに私は、神戸駅の近くにあり古くは海産物問屋を営んでいたという店を貰い受け、それをアトリエとして移築したのです。四枚戸の上の梁は、巾80 cm に厚み23 cm 長さ8 m もあるという松の古材です。大黒柱は、樺でした。黒々とした天井板何もかも、どっしりとしています。私は消えていく運命にあったこの建物に出会い、私の仕事場として再び生き返って貰いました。具体的には、私の自宅にしている、農家を移築した建物に違和感のないよう、湖北の農家の古材や姫路の古寺の古材を使用して、二階部分を増築して下さった建築家にお願ひしました。黒い古材に白い漆喰、広いガラス面からは青い海と山の緑が入り、瓦は面とりの鼠色日本瓦です。私は、風土も地域もないプレハブ式の建物がどんどん増えていくのがたまりません。

どうして、もっと考えないのでしょうか。神戸から京都へ1時間 JR に乗り外を見て下さい。目にとまる建物が何軒あるでしょう。目にとまる地域が何処にあるでしょう。この性格のなくなった建物群、昔から日本はこうだったのでしょか。違ったと思います。

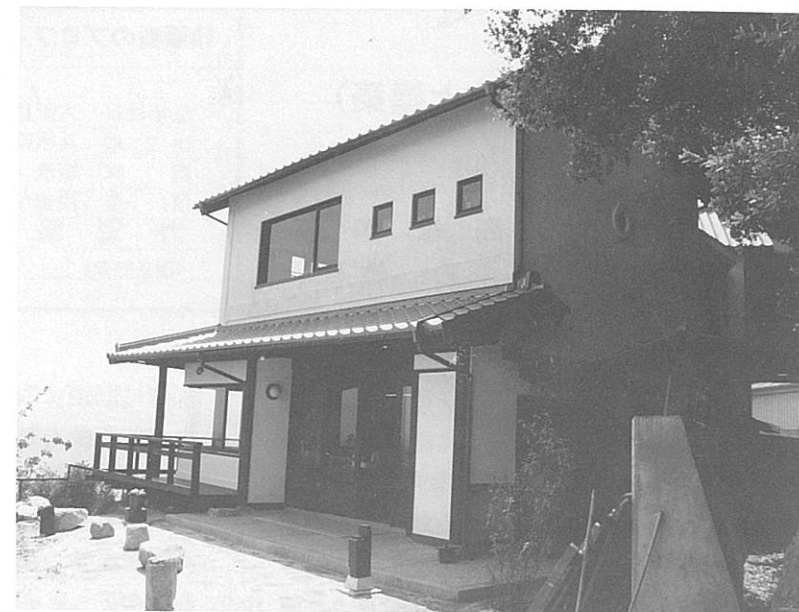
朝、日の出と同時に眼を覚まし、近くの荒地を耕した畑に、バケツに一杯の水を持って、麦ワラ帽子をかぶって出かけます。少し耕し、今日はネギを並べて植え直した。二、三日前の雨で大根、高菜、レタスの芽が出てきています。ししとう、トマト、ささがを収穫して家に帰ります。7時、子供のお弁当作り、さっきの野菜も入れます。今年は、ソーメンウリが沢山取れました。毎朝雄花を雌花に交配した成果です。

朝9時までになるべく掃除、洗濯朝食の後片づけをして道を隔てて20 m 程下のアトリエに降りていきます。今、百日草が咲いています。

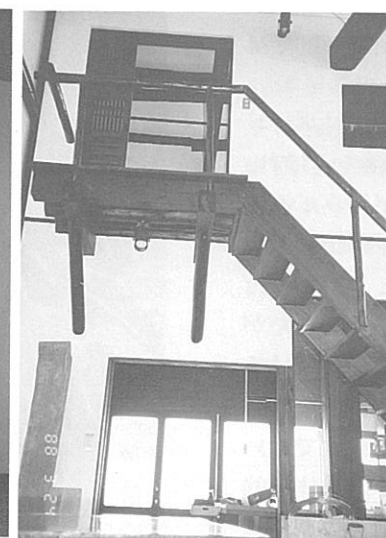
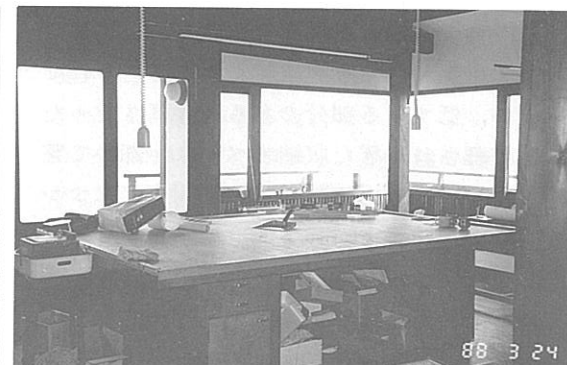
山の傾斜面に栗の木を植えました。アトリエの前の庭には、さくらんぼ、ざくろ、キウイ、無花果、ネクタリンを植えました。

擁壁や崖には、蔦を這わそうと、蔦を一節ごとに切っては、挿しまわっています。

さあここで、私は、一生仕事をしようと思っています。海を見て、土を耕し、花を、愛でて、ステンドグラスを作っていきます。絵を画きます。旅をして、又帰って来て、絵を画きます。



アトリエ



## 私の挑戦 (私と建築)

高松 洋子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

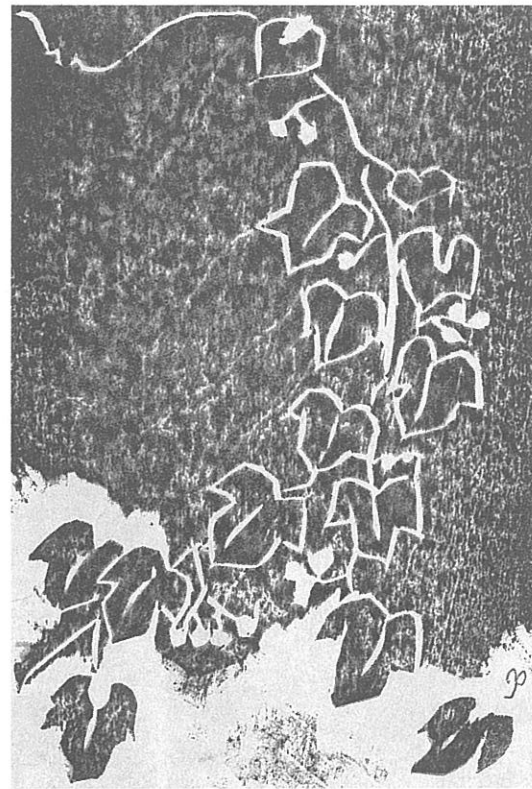
生年月日 大正12年11月6日  
 出生地 兵庫県  
 趣味 短歌 いけ花 木彫  
 信条 快適な住空間の創造

旧制神戸女学院専門学校で住居学を学び設計図面を引くチャンスがあった。時間と空間の繋りのなかに存在する線と面で構成される図面上の魅力に強くひきつけられ、その直線上への気持を永い間忘れないでいた事が、また図面を引こうと思わせた。住まいは人によってつくられるものであり、住まいは人をつくるものでもある。例えば外観を重要視する余り子供部屋の位置が成長過程を考えられていない、低すぎる部分のある天井高さだったり、整理され過ぎた収納スペースが却って整理しにくくしている、などの疑問点にぶつかる内に二級建築士試験を受ける事となった。試験は一回目学科に合格、製図はその年も次年度も不合格。三年目は学科試験からやり直しである。

記憶力欠けゆく年齢を試験に凝り  
 (閃めく智慧に支えられつつ)  
 難解の答案用紙の渴きゆき  
 (迷いはつのる刻絶ちし眼に)

製図、試験と落ちている間に『落ちこぼれ』といわれるこどもたちの悲しみがしみじみとわかった。四年目、三回目の学科試験である。もはや私の生と向き合う執念にとりつかれた様な感じであった。毎夏講習は受けていたが今回は早春より講習を受け始めた。講習はその都度試験があり毎回宿題が出る。予習復習の繰返しである。今迄の様な試験態度ではいけないと問題は端から端まで目を通し体系的に覚えていく様につとめ特に不得意な構造は

入念に問題に取り組んだ。問題という問題総当たりと正解をしっかりと覚えるという事が功を奏し学科試験に合格。製図も時間のゆるす限り図面に向い練習、製図も合格。四年にわたる試験もついに終わった、時に五十八才の秋であった。



カット 武田百合

## 私の住まい

阿部 保代  
(阪神支部)

私は、鹿児島県で生まれ育ったので、物心ついた頃から、台風の恐しさ等、身を持って体験してきた。そして、その頃から私の中に「丈夫な家」台風がきても、家族が安心して過ごせる「私の住まい」に対する、執着心が人一倍旺盛に芽生え始めたのだろう。そしてその思いは結婚する人は大工さんという願いにつながっていったのだろう。

おかげで、大工さんに嫁ぐことはできたが肝心の住まいの方は、借家住まいからのスタートとなったのでした。その後、公営住宅に移り、自分達の持ち家で生活するようになったのは十数年程前からのこと。この持ち家には格好などどうでもよい、「丈夫で長持ちする、台風にも強い家」をと、私の希望が叶って、鉄骨造りとなった。

一階を車庫、二階を事務所、三階に私達の「住まい」。

私の一生に二番目に大事な宝物と思っていた、自慢の鉄骨造りも、錆に弱いときき、鉄筋コンクリート造りなら、大丈夫だろうと思い、数年前に、短辺6.3m、長辺16.8m、一階を倉庫、車庫にと高さ5m、二階を「住まい」と高さ3.3mの鉄筋コンクリート造りを建てた。

いつの日か、子供達も独立し、夫婦で生活することを思い、和室2、洋室1、台所、便所、風呂、洗面、玄関とこじんまりとまとめた。

今までの玄関は、畳半帖の広さだったので

「普通の玄関がほしい。我が家への訪問者を玄関で、三ツ指ついて迎えてみたい」と、いつも思っていた。少しでも似たようにと思って計画した。食事も、ずっとテーブルだったせいか、落ついてゆったりした気分で味わいたいものと思って、座卓にして、和室で食事するようにした。

丈夫で長もちする、日本一すばらしい私の城ができた、と、ルンルン気分、完成を待ちきれずに引越しをした。

一週間が過ぎた頃から、足の膝小僧が痛みだした。引越しなどで疲れたのだろう、そのうち治るだろうと軽く考えていた。いつまでも痛みは続く、病院に行くのも億劫になり、医学書？ を読んだら、40才から50才にかけておこる症状で、なるべく、膝を曲げないように、食事もテーブルでするように、生活態度を変えていくようにとの事。

体が老化しはじめていることなど、気づかず、夫達の反対を押しきって、意気揚々と、計画した手前、すぐには今まで通りの生活には戻れず、意地をはって、ルンルン気分もどこへやら、毎日、膝小僧をなでなでしている昨今です。

人生八十年、後の半分、ルンルン気分、快適に老後を送れる「私の住まい」を目指して努力してゆきたいと考えています。

## すまいの公私領域

鍵野 洋子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

1938年生れ  
鍵野建築設計自営  
設計者と施主の意志の疎通をはかるための提言を  
していきたいと思っている

公道・私道のように、公私は官民の意味に使われることが多いが、天下の「公」道と言うときには、空間的には私人の専用地の外、世間の人の利用するところを指す。これに対し住まいは私空間である。以下、住まいにおける公と私の境界と空間の性質の違いを考えてみたい。

#### 〔公私の領域〕

世間のルールが私生活に立ち入ることが少なくなった。公の領域では世間のルールを守らなくてはならないが、私の領域（個人の住まいの中）では「法に触れないかぎり外とは違う生活のしかたも私人の自由」と現代では認識されている。

勤め人化や分業化によって、多くの家庭の職業や家事に関わる作業が外部化され、家庭が消費と休息の場になった。従って職業に関わる公私領域相互の出入りもなくなり、日常境界を通るのはほとんど家人だけとなった。また住まいの中で使用人・居候などの他人と一緒に住むことが稀になった現代では、境界を一步入ると身内だけの生活ができる。

「外では社会活動、内では休息」という公私の場の分化が、生活態度も分化させた。世間では緊張し・たてまえを通し・ルールを守り・いわば仮面を被っている人も、身内だけの暮らしのなかでは緊張を解いて本音を出し「ありのままの自分にかえり気を休める」ことができる。見ず知らずの人や、顔見知りのために反って立ち入れたくない人の目から気楽

な休息のプライバシーを守るために、公私の領域を隔離する要請は強い。

#### 〔公私の境界〕

人家の密集していないところでは、距離が境界の機能を持つが、「まち」など集まって住むところでは境界の装置が必要になる。

公私の領域の境界は普通、門・塀・玄関である。よく「玄関は家の顔である」と言われる。門や玄関は住まいにおける公私の接点であるため、世間での緊張・たてまえ・仮面を外向きに美しくよそおう。外回りは門扉や塀で目隠しされたり、隠さない場合は植木や花、カッコいいドアや表札で飾られ、住む人の世間に対する心意気を示す。玄関はやはり花や絵で飾られ、壁や建具や衝立などで仕切って、家の楽屋を見られないようにする。来客は玄関から客間へと表通りを案内されるが、これらの場所は公の顔であり、内幕ではない。

「玄関はただの通過空間であるから空間の質は取り立てて考慮する必要はない」「玄関などなくても良い」という主張もあったが、くつろぎと緊張、本音とたてまえが表裏の生き方にはしっくりしないのか、下火である。

いっぽう「夫婦喧嘩が路地に飛び出してくるような暮らし」ができて、本音を隠す必要のない人にとっては、当然さほどの境界装置は必要ではない。

町家や路地の暮らしでは、しっかりした境界装置や、距離による内外の空間の質の変化を造りだし難い。格子窓一枚といった境界で

は、外から覗くこともできるし、内の気配も外に漏れる。それでも境界の機能を果たしたのは「外から覗き込んだりしない」「見えても見えないことにする」まちの暮らしのルールがあり、外を通る人が顔見知りだったからである。内では街路に面した部分が店の間や仕事場や表の間など、私領域との間の緩衝地帯になっていて、食事や就寝にはさほど広い場所を必要としない暮らし方であった。

現在の都市では、古くからの住人がそのまま住み続けているようなところでないと望むことは難しい。

#### 〔公私の境界の幅〕

息がかかるほどの距離なのに豆粒ほどの眼鏡で覗かれたり、ドアを開けると家庭の匂いがどっと押し寄せる。戸惑いを感じたことはないだろうか。

家の外の緊張した活動に対し、家庭生活の機能は休息である。私室で眠り、一人でぼっとし、読書や音楽を聞く。居間や食堂などの公室ではくつろぎ、家族との団欒を楽しむ。公室とはいえくつろぎが主になる居間は、緊張を伴う来客とは相容れない。戦後の狭小な住宅には客間のゆとりはなかった。家の体面よりも家族の生活を大切にする傾向が、客間をファミリールームにした。私室、公室ともに住まい全体がくつろぎの場になった。玄関のドアを開けるときに、来客も家人もともに戸惑うのはそのためである。

敷地や建物の面積が広いと、実際の距離や

空間の広さによって、境界の幅をとることができる。屋敷町ではしっかりとした門と塀が公私を区切る。門からアプローチ、玄関から客間への距離が私生活を守る。

さほど広くない住宅でも、一室のゆとりがあれば客間がとられるようになった。家の権威のためではなく、私生活を守るためである。ごく狭い建て売り住宅でも何とか門塀を付け外向きの装いをして来訪者に対する身構えをしている。一億総中流化の門塀志向だけでは説明はできない、境界の幅が必要なのである。またこのわずかな幅が住まいの閉塞感を救っている。「マンションはいや」という人がその理由に「壁や重いドアに閉じ込められる暮らし」を言っている。

集合住宅の廊下に並んだ鉄扉は殺風景だ。世間に対する、住人の個性ある心意気が感じられないので戸惑う。最近では集合住宅の玄関前にわずかでも私領域を造り境界の幅を持たせるものが出てきた。また閉塞感を救うため廊下側に大きな開口をとるものもあるが、境界の幅があつて初めて成立する。最近の集合住宅の敷地を塀で囲み門を付ける型式は、共用スペースを境界の幅に見立てたもので、門の中にいるのは顔見知りの人ばかりという安心感で成り立つものである。

プライバシーの確保は私生活の孤立化を招く。公私境界の質と幅の取り方によって、地域社会との繋がりをどう生かすかが今後の課題であろう。

## 最近の“我が家作り”の構想

苅谷君代  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

昭和20年生。夫の自営の鉄骨建築業が起因で、子育てが終りかけた頃から建築士試験にチャレンジする。夫・長男・義父の4人家族。自営の鉄工所の事務のかたわら、兼業農家を手がける。時々出かける1人のドライブが好みの反面、読書と編物にも夢中になる時がある。神戸市北区在住。

「住」について着眼を持つようになったのはここ数年の事であり深くはない。不便を不便と感じながらも、与えられた器に住み無駄な動線を動き回るわずらわしさは、女性の宿命と思ひ長年住家については、男性の考える職域と思ひ込み費用のかさまない工夫、自分の手におえる改善は、手がけてきたが、それ以上の模様替りフォームは要求しないできた。今、わが家は百年近く経過した農家の老朽家屋である。

四季の温湿度と通風には、風流ふうりゅうさを通り越して自然と同居する気構えが必要であり、又家事労働の、特に掃除・収納の手抜きは後の自業自得となる。農家の生活や姿を想像される時、とかく外観が外壁や植木で囲まれ、大屋根のわら葺屋根や寄せ棟の瓦屋根が入り込んだ複雑なレイアウトで、とにかく広大なものが多い。わが家には外観上の威厳はないけれど、動線は同様と思える。

農家を考える時、都会生活の必要空間以外に、

- ・上の間(8帖位) 下の間(8帖位)……客間。
- ・下足でかなり奥まった厨房までの出入通路。
- ・厨房とは別に下足で使用できるシンク類。
- ・下足で使用できるウォータークローゼット。
- ・納屋……農作業の場及貯蔵の場30~40m<sup>2</sup>位。
- ・農機具置場……50m<sup>2</sup>位、出入及天井高さ考慮。

- ・収納庫……昔の倉に相当するもの。衣類庫、食器備品庫、穀物庫等と区別され家を取り囲むような配置でいくつか設けられていた。

これらの要求を満たすようなプランは書店や折込み広告にはない。敷地の条件、生活形態、家族のプライバシーに加え、移り変わるであろう家族の増減を考慮に加えなければならない。長年の生活習慣や家族構成を考える時、家族以外の人のプランは住む者が設計者のそれに、はめ込まれる結果となり、建物という動かせない入物から受ける重圧は、継続的なプレッシャーにならないだろうか。プロフェッショナルの知識も借りたいけれど、実現を急がぬプランをデザインするための充電期とし、できるだけ展示会じみた場所ではなく、周囲のつき合いから学べる生の住生活を参考に、チェックポイントを探り出したい。

わが家には息子が一人居る。何も通学できないエリアではないのに、京都で大学生活をすごしている。これも私の考える理由の一つは、住居の不便さからのもので広くても使い勝手の悪い、友達のつき合いにもプライバシーが保てない、家庭の生活の場を他人に見せたくない、等の若者離れの原因がある。家は家族の考え方、生き方をも変える要素にもなり得る。息子の住む所は賀茂川のほとりの鞍馬山に近い、京都でも北区の住居地区で学生のためのワンルーム式貸借住宅である。東西

方向の中廊下式で1F8室の4階建、RC造、個室広さ4m×7m位、ベランダ付で簡単なサントリー及厨房が組み込まれている。京都特有の暑さ寒さも気密性に富むためか苦にならないらしい。そこで1年経過したこのごろ、「長い時間室内に居ると壁や天井が押しせまってくるように思える……」との事。1歩外に出れば賀茂の千鳥や神社仏閣が目のあたりにできる環境の中で、また室内では何事も処理できる申し分のない生活と思えるのに壁や天井が押ししてくる圧迫感はどこからくるものか。色彩か照明かスペースかと探ってみるけれど決め手はない。天井と壁はモルタル仕上のクリーム色、床は畳6帖、ベランダ側に入出口兼用のアルミ引戸、外部からの採光も望める。そういえばいつか知人にマンションの1室で子守と留守番を頼まれた時、それに似た気持を味わった事がある。京都であっても神戸であっても、それは地理的に置かれている点とは別に、建築物という囲いの空間は孤独感と寂寥におそわれる。本人の精神的要素以外とするなら、建築物の配置やスペース、あるいはインテリア部門は、現在社会のストレスやノイローゼといった医学面にまで関与するかも知れない。私は息子の集合住宅に見る便利さや、計画及工法面の長所を見つけた。

高校時代の友人が、大阪の北区天満に住んでいる。関西の地価高騰の発端地ともいえる所で南森町駅や天満駅に近く、O.B.P.の周辺に入る商業地域である。戦後大阪城だけを残し、焼け野になった頃からの大阪の姿を、御両親が語られた事がある。その当時100m<sup>2</sup>程度の区画を20m程離れて2箇所、住家と作業場の目的で、1区画を10万円程で所有し、それを基盤にした今の生活があると語られる。街の流通が活発化すると地価が上がり、建築物が上に伸び、室内から見えていた大阪城も昭和40年代の半ばには見えなくなり、今お城の代わりにベランダからツインビルの上層部が見える。高騰する固定資産税のため、貸借の貸

事務所を2・3階に設け、生活のスペースは4・5階とし、自営のための事務所を1階にとる。まさに立体的動線で事務所との兼ね合い、又作業場との連絡と結構上下間を往復する。屋上には鉢植えの木々が所狭しと密集されている。義父の趣味で水やりで1時間はかかる。周囲の建物の日の当たる水平な場所にはわずかの緑が見える。人は本来、木々や育樹に生きがいや安堵を見出すものかも知れない。4・5階部分を生活スペースとした日常生活は、ホームエレベーターを設置しない時若さと健康が必要であり、高齢者や体に障害を持つ人達の生活には不利である。友達の日々の動線を考える時や、もうすでに体に支障の兆しに見える義父の姿を見て、自分で体を動かせない状態に陥った時、それは社会との隔離につながる不安を思う。人の老後には土や日光やコミュニティは平等に与えられるものであり、まして建物のレイアウトや、設備の不備からの起因であれば、それは設計者の責といえよう。

わが家以外の生活の場は行事やつき合いだけでは入り込めるものではない。私は幸にして全く異った2件を比べ参考にする事ができる。若者の好む個室生活、都会の立体的動線、加えて高齢化問題、それにわが家の平面動線の生活に、共通した面と、分離して考慮する面、との整理が必要と思える。ある方向に必要以上の動線は無駄と不経済と体力消耗が混同し、必要なスペースの不足した空間は、不安といらつきの原因となる。

これまで少しばかりたずさわってきた鉄骨建築の分野も生かしながら、わが家作りという自己採点のできる物件を、最近の私の課題にしている。見栄や体裁や芸術でないわが家作りを地道に構想してゆきたい今日このごろである。

## 名谷コープタウンについて

栗林 郁子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

現在、子供や夫中心の専業主婦の生活から脱皮し、再就職したいという希望を抱えている。職歴4年、アルバイト経験有。昨年、市住宅供給公社のL.H.M.(レadiesハウジングモニター)1983年自邸建築。家で仕事をするよりも、外に出て学びたい。

### 1. 動機について

今回の原稿のテーマについて、1983年に設計し(正確に言うと一部設計した)、1984年に竣工し入居した我が家について書けばよいというお話もあったのだが、この我が家は新興住宅地に建つ一戸建てで、4年目になる。一戸建てで恵まれている点もあるが、団地やタウンハウスに比べて、むしろ劣る点にも、気づいてきた。それは、1戸建ては近隣の結びつきがあまりないということだ。とはいえ、私もお隣りさんと野菜の共同購入などをして、結びつきもうまれつつある。が、しかし、同じ地域の住民という様なコミュニティ意識は、なかなか育っていかず、どちらかという個人の方の自由の方にばかり流れがちだという傾向にある。そこで、是非、集住の良さを具現している名谷コープタウンを調べてみたいと思った。調べた結果わかった建物の大概の内容については、データとして下記に書き現わした。読んだ資料の中で是非書きたかったことを留意点として抜き書きした。自分の目で見た建物に対する判定は評価として書き加え、今後の参考にしたいと思う。

### 2. 名谷コープタウンについて

当タウンの概要は左表の通りである。

建物名称	名谷コープタウン (旧神戸市で最初のコープ住宅)
場所	神戸市須磨区神の谷
企画・方式	公団(総合コーディネーター) グループ分譲方式 COM計画研究所(総括)
設計監理	名谷コープタウン、コーディネーター技術者集団 (旧16人の建築家・プランナー・住宅コンサルタントから成り5つのチームに編成された。)

竣工	木造 1982.7	RC 1982.12*
戸数	木造 23戸+17戸=40戸	RC 16戸+12戸+12戸=40戸
密度	63.6戸/ha	
容積率	72.3%	建ぺい率 38.2%
名谷コープタウン G <sub>1</sub> グループ平均(RC系16戸)		
コーディネーター	岡本建築研究所, SD設計, 萩尾建築事務所	
敷地面積	2042.3m <sup>2</sup>	世帯数 16戸
構造・階数	RC 3階建	建物形式 タウンハウス
各戸分担敷地面積	127.6m <sup>2</sup>	各戸専用敷地面積 82.9m <sup>2</sup>
共用敷地面積	44.7m <sup>2</sup>	共用(コープタウン全体)敷地面積 24.6m <sup>2</sup>
建築面積	40~50m <sup>2</sup>	延床面積 100~110m <sup>2</sup>
外装仕様	コンクリート打放し 吹付タイル 和瓦葺一部ルーフテラス	

### 留意点

公団によるアンケート調査のまとめから、ユーザーの感想として、以下の事。

- ・全体計画について。もっとユーザー主導で討議・決定されるべきだ。計画はもっと変更のきく形で提示して欲しい。
- ・共用施設について。子供の遊び場、敷地内植栽については満足感が低い。
- ・個別設計について。玄関まわり、専用庭全体の配置などに関わる所では、希望が生かされなかった人も多い。

もう一方、名谷コープタウンの住人である神戸港埠頭公社の湊さんが書かれた、「コーポラティブ住宅のすすめ」から、次の点に留意しておきたい。

- ・共同の駐車スペースにし、約20mの隣棟



G<sub>1</sub>北棟とグループコモンの接し方



G<sub>1</sub>グループコモン・共同駐車場



G<sub>1</sub>北棟を道路から観る。



コープタウンの共用部分・緑道

間隔と、約800m<sup>2</sup>の面積を確保し、コンモンスペースに好結果をもたらす。これは共同駐車を根強くおしすすめた人がグループの中にいたから実現した。すぐれたリーダーが、ユーザーの中に存在することが必要。

### 評価

- ①北棟と南棟の建物が雁行し、隣棟間隔が最短になっている所で、プライバシーの点が気になった。
- ②間口が狭く、2面採光なので通風が良いかどうか? 一部3面採光の所もある。
- ③西側は、西日対策がされていない。
- ④3階のバルコニーからの眺めは、よさそうだ。
- ⑤玄関まわりに、スペースがもっと欲しい。
- ⑥コモンスペースに、全戸の玄関が向かい合っていない形なので、北棟の一部は、道路からわずかの緩衝で玄関に達している。

### 3. まとめ

最初は良くできているように思ったこの建物も、調べてみると、もっと工夫の余地がある様に思える。これ以外のコーポラティブ住宅や、今後新しくできていくものなどもあわせて調べ、今後の参考にしていきたい。

今回、萩尾建築事務所で、貴重な図面や資料をお借りしました。表の数字は、その資料

に依る所大です。紙面を借りて改めてお礼申し上げます。

また、延藤安弘著「集まって住むことは楽しいナ」(鹿島出版会)の中には、デネブ(大阪府住宅供給公社が再開発した。), あじろぎ横丁(宇治)など、沢山のコーポラティブ住宅の資料が満載されていました。また機会を作って、それらを見学したいと思っています。

## 人間生活の 基盤になるすまい

小西 文  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

- ・出生地 芦屋市
- ・職業 消費生活コンサルタント
- ・趣味 バードウォッチング・家並ウォッチング・テニス・油絵

### ○人間らしい住居

1987年は、国際連合が、国際居住年(IYSH=International Year of Shelter for the Homeless)として、住宅難に苦しむ人々の為に人間らしい住居を保障するよう、今後10年の計画で実施することを要請した年です。その11年前の1976年に、国連人間環境会議(ハビタット)の「人間居住宣言」では、住宅難の解消だけでなく、人間が健康に住み続けて行く為のあらゆる条件を求めています。国際居住年は、1948年の「世界人権宣言」の原点からの展開の延長上にあるのです。

日本では、1927年の「不良住宅地区改良法」の初めての制度化に先立って、関東大震災後の東京において、同潤会が、不良住宅改良事業を行っています。

### ○同潤会の鉄筋コンクリートアパート

震災当時、内外から寄せられた救援義損金のうち1千万円を基金に翌年設立されたのが、「財団法人同潤会」です。同13年に仮り住宅2160戸、普通木造住宅3420戸を建て、翌年からは、当初の応急体制から恒久的な方向に転じ、耐震耐火の庶民住宅供給事業として、鉄筋コンクリートアパートの建設をはじめました。最初の、中之郷アパートの設計は、当時東大の岸田日出刀研究室が担当したといわれ、和室を主体とした日本的な要素を組み込んだ最新鋭アパートでありました。同潤会の若い

設計者たちは、当時の欧米の建築の流れを取り入れながら、住棟配置、住戸の組合せ、共用施設、各部のディテールに至るまで、研究を重ねて次々と個性的なアパートを16カ所に建てました。その多くは戦後、住人に分譲され、老朽化はしていますが昭和47年調査当時まだ建設時の、コルクの床が使用されていて快適であるとの意見であったと記されています。アパートのまわりには樹木が育ち、自治会の活動も地域住民と共に歴史の流れを反映しつつ、住み継いでいる人達が、さまざまな習慣を形づくり、共同体として借りものではない生活があります。

### ○大正の住宅改造博

ホームレスの為のすまいの確保から始った住宅建設事業の一方で、文化的な、よりよいすまいを目指して開催されたのが、大正11年の「住宅改造博覧会」(日本建築協会主催)です。会場は、大阪府箕面市の桜ヶ丘で、現地にもそのまま居住できるように計画され、住宅改良のための設計コンペ応募作品の中から選ばれた25戸が建てられました。住宅改造の要点として、具体的に、常用室を椅子式、寝室を畳敷、常用室と寝室の分離、客室を廃し子供室を設ける、暖房設備を施す。「住宅改良の要諦は、土地そのものの整備から出発しなければならぬ」の言葉が残されています。今も12戸が健在で、美しい街並みです。

### ○良質設計・施工住宅の重要性

以上の、戦前の優れた建築家達の努力で実現した住まいが、今も「時の経過」が育むばかり知れない大切な要素を包括して生きている様子を見るにつけ「住まう」ということの基盤に、ていねいに心を砕いて創られた高質の住宅でなければならないこと。そして、庶民の手の届く価格に、政府の施策で可能にすることが必要だと思います。

若し、戦後の混乱期以後に、大正・昭和初期の住宅の流れをとり入れて、良い設計と施工に徹すれば、公団間の狭小モジュールを作っていなければ、優れた建築家達の参加で官民協力して良質の住宅が、戦後43年の時の経過で、美しい街と、人間形成に大切な場として立派に育っていたかも知れません。

住宅政策の無策がもたらす貧困を、これから解消して行かなければならないわけです。

●同潤会により建設された鉄筋コンクリートアパート一覧表

アパート名	建設年度 (着工)	戸数					計	階数	棟数	付帯設備
		一般	独身向	店舗	その他					
青山	大正14年	137			1	138	3	10	児童遊園	
中之郷	大正14年	92		10		102	3	6	阿亭(集会場)	
柳島	大正14年	170		22	1	193	3	6		
代官山 (渋谷)	大正14年	230	94	9	4	337	2 3	23 13	児童遊園、娯楽室、公衆浴場、食堂、鑿井水道	
清砂通 (東大工町)	大正15年	486	138	35	4	663	4 3	3 13	児童遊園、食堂、娯楽室、医療室	
三田	昭和2年	49	18		1	68	4	2		
三ノ輪	昭和2年	32	19		1	52	4	1		
鶯谷	昭和3年	95			1	96	3	3		
上野下	昭和3年	47	24	4	1	76	4	2		
虎の門(註)	昭和3年	64				64	6	1	食堂、エレベーター	
大塚女子	昭和4年		149	5	4	158	6	1	食堂、浴室、日光浴室、音楽室、応接室、エレベーター	
東町	昭和4年	21				21	3	1		
江戸川	昭和7年	126	131	1	2	260	6 4	1 1	児童遊園、社交室、浴室、食堂、理髪室、各室ラジオ、電話、ラジエーター、エレベーター、娯楽室	
山下町	大正15年	70	80	6	2	158	3	2	食堂、娯楽室	
平沼町	大正15年	116			2	118	3	2	娯楽室	
住利 (猿江)	大正15年	251		43		294	3	18	児童遊園、善隣館	

(註)同潤会館/同潤会の本部の建物の一部につくられたアパートで後に全て事務所として改造された。都市住宅《生活史・同潤会アパート》72年7月号より。



## 住まいのグレード

内藤 玲子  
(神戸支部)

### 執筆者のプロフィール

1939年1月4日生れ。1962年大阪市立大学家政学部住居学科卒業。兵庫県勤務。1975年県退職、1977年同学部大学院修士卒業。現在、内藤玲子住宅設計事務所及び短大非常勤講師

### 1. 「類は友を呼ぶ」というが。

最近、次のような相談があった。相談者の隣家が建替え工事をはじめた。隣りと相談者との敷地に段差はないのに、マンホールが敷地面から70 cm 位上がったところに突き出ている。

なるほど、現地に行くと、隣家はすでに隣地境界線近くに高くそびえ立ち、迫ってくる感じである。多分、民法でいう隣地のあき50 cm だろう。基礎がどかんと掘込みなしの敷地の上に坐っていて、全部、見えている。排水管は全面地盤以上に顔を出している基礎から公然のごとく腕をだしている。従来なら当然、排水管は敷地を掘り返して見え隠れしているのに。業者にたずねると、「側溝をとるつもりはない。だが、境界を兼ねた擁壁は造る。でも水ぬき穴はつくらない。この地区なら、この程度で十分。教科書的な敷地の排水処理は高級住宅地のことだ。」と事もなげに答えた。地区のグレードが高くないところでは住宅の付属物もレベルが低くて当然という答えであった。「はきだめに鶴」はかえって見苦しい。と考えているようだ。

### 2. 住まいの外部と内部のグレードは一致する。

マンション（これは集合分譲住宅とする）は現在、都市住居の一般的な住まい形式となっているので、住まいの外部と内部のグレードが一致する例をマンションにとると、次のことがいえる。これはマンションの募集パン

フレット（1967～86年に建築された10棟1012戸）からである。

マンションのプランは戸建化傾向が強いほど、内部のグレードの高いマンションと考えることにする。例えば、戸建化傾向が強いプランとは、サニタリーまわりが開口つき、バルコニーの長さや巾、勝手口や納戸や廊下や暗どん部屋の有無、等々で判断することに。全国的に有名住宅地のA市の場合をみる。前述の戸建て化傾向を示す要素をより多く含むマンションほど、A市内でも特に高級住宅地区内に建築されていて、さらに、これらのマンションは、マンションブームの初めにあらわれている。

阪神間地域の場合もA市とほぼ同じマンション建築の動きをしている。即ち、初期は阪急電鉄以北の一般に高級住宅地といわれる地域に戸建て化傾向の強いものが現われている。後に、一般住宅地にもマンション建築は進むが、住戸プランは初期のそれよりグレードの落ちる内容となっている。

マンションの外部のグレードを募集パンフレットで判断するのは、はなはだ厚いことであるが、外壁仕上げでみると、やはり、住戸プランのグレードの高いマンションほど、外部のグレードが高くなっているように思われた。

住宅の内部は他人には目立たないが、外部はいつも他人にさらされ、その家の雰囲気であらわすものだろう。だから、住みて側も地

区の品位を下げるような外観のマンションには二の足を踏むのかもしれない。

ある中学校の話である。通学路の一角は建ぺい率40%、容積率80%で、緑と住宅が適度に混り合っていて、中学生のおしゃべり通学路となっている。そこに、2戸の家が塀の外に飲物自動販売機を設置した。これらの販売機は意外にも中学生に不評である。というのは販売機があるために、せっかくの通学路の品位を下げたとなっているそうである。即ち、中学生であっても地区のグレードはほんやりとだろうが、認識しているようだ。住宅を設計するとき、住宅の内外のグレードをある程度一致するように施主を当然説得するだろう。

前述の業者の例は極端な発言かもしれないが、結果的には大なり小なり「類は友を呼ぶ」というように、住宅と地区のグレードはある程度一致しているように思う。

### 3. 充実した衣生活の背景

衣食住のうち、まず衣が最初に個性化に入ったのは周知の通りである。近所のスーパーの買物でも、年齢に関係なく、トータルに个性的に装われて、都心にいる錯覚に落ち入るときさえある。要するに衣生活水準全体のレベルアップの完了時代にある。衣食住のうち、衣ほど手軽に改善できて効果の上るものはないだろう。衣はいつでも住とは全く切り離れた環境に人を置いてくれる。また、自分の衣を他人の衣と比較することも簡単である。現在のように衣の選択幅が拡大しても、過去の経緯からか、中学校、高等学校の家庭科でみると、衣の時間は圧倒的に多く、その中でも裁縫の比重は最大となっているようである。そこで生徒間の衣感覚は切磋琢磨して向上する。選択眼の向上でよりよい衣商品が市場に残る。

### 4. 自分の住まいの内部グレードは客観的に知りにくい。

衣はすでに自分自身の衣生活のモデルを形成している。だから多様化個性化が実現している。だが、住は「雨露をしのぐ」から「生活の器」まで進展してきたところである。住

は他人の住宅の中に入ってはじめて、「生活の器」の質である快適さ等の居住水準がわかると同時に、我が家の客観的水準を認識できる。そこで、住の展望を持つ。

住まいの一般向け雑誌は多く出回っているが、あまりにも美しく装いすぎて、現実ばなれしている。そこにある絵は夢また夢の世界かもしれない。お料理上手になるにはおいしいものを食べるのが早道というように、現実の美しい空間で生活を見て、自分もそこで新たな体験をして、はじめて住感覚は向上する。これは衣とちがって、住宅の内部に入ってはじめて認識できる。

中流意識の生活者が大多数であるが、所得と住宅の規模が正比例しているということは住については衣より水準が低い裏付けでもある。住は衣のように全階層まる見えの交流衣生活ではなく、ある一定の閉鎖環境の住生活にあると言えるだろう。

### 5. 「はきだめに鶴」の住まいづくり

前述の話しに戻るが、住宅の質のグレードは地区ごとにわかれていることになる。グレードの異なる地区間では地縁的な近所づき合い等から端を発した住宅の内部に入った交流をしにくくしているように思える。もちろん、住は衣に比べて、非常にお金がかかり、簡単には改善できないが。

生活の内、衣がトップを切って個性化に入り、良質な衣生活を享受できるようになったのには長い道程があった。住も回り道であっても、小さいときから学校教育などで住感覚を育てていくのが、地区や地域の住宅ひいては町並みのレベルアップにつながるのではないだろうか。これには建築設計者のしんどい努力より建築主や居住者の住感覚の向上の方が早道かもしれない。だから、地区や地域のグレードアップの突破口となる「はきだめに鶴」となる住居が建築されるのを願っている。これは子供、大人への実物教育であると思う。

## セカンドライフの セカンドハウス

藤田 昌  
(神戸支部)

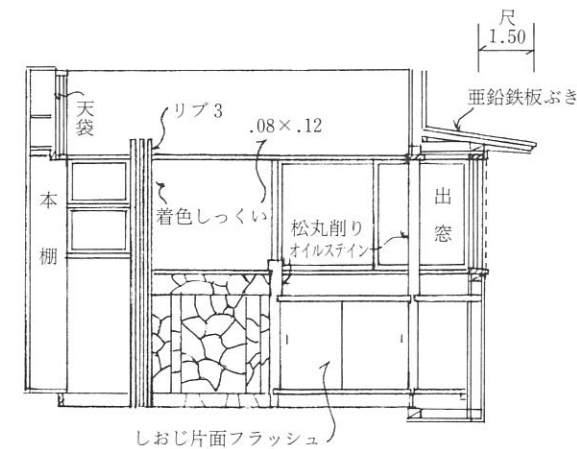
### 執筆者のプロフィール

大正14年3月13日生，大阪府女子専門学校家政  
理学科卒，神戸大学工学部建築学科研究生，兵庫  
県立篠山高等女学校教諭，神戸海星女子学院教諭  
等を経て，現在神戸学院女子短期大学助教授，著  
書『家政学概論』（ドメス出版）「住まいのあり方」  
の章を担当。

私は神戸市灘区の摩耶山麓にある“まやの家”と、北区のニュータウンにある“藤原台の家”との2軒に住んでいる。両方の家は自家用車で六甲トンネルを通過して30分位の、六甲山の表と裏にある。夫は探しものをするのに自転車で2軒の家を往復することがある位で、1日のうちで何回か往き来することも、しばしばである。

“まやの家”は30余年前に私が設計した家で、季節毎に黄梅花、紅梅、沈丁花、海棠、椿、八重そけい、木蓮、つつじ、はなずお、こでまり、くちなし、泰山木、さるすべり、芙蓉、木犀などの花が次々に咲く。木々も成長して着着いた雰囲気であるが、夫の第二の人生の勤務先のある相野までは自家用車で早くて1時間はかかる。雪の降った寒い朝など六甲トンネルを出たあたりはスノータイヤやチェーンなしでは通れないことが多かった。夫はそういったものをつけるのが苦手である。そんな日のために夫の勤務先の近くに家を持ちたいと希望した。そして六甲ニュータウン藤原台の発売を待ちかねて分譲地を申込んだ。こんな家を建てたいなどと計画してはいたが、申込者が40数倍で落選し、続いて共同分譲(公団の土地に民間企業が住宅を建てている)も落選した。そこで止むを得ず公団の分譲住宅を申し込んだ。これは宅地の条件はよいが、建物の方は、おしきせで、外観は好きでなかった。競争率は前二者より低く、私の申し込んだ住宅は、申し込み時、誰も申し込んでい

なかった。抽選時にも2名だけだったので当選した。先に述べたように外観はあまりぱっとしないけれど、間取りは良い方だし、アイホンの簡単なセキュリティシステムや、風呂コントローラのついた大阪ガスのエックスIIシステムの給湯暖房など採用している。共同分譲の方は見映えのする家が多いが、設備はおおむねここまでしていなかった。購入後、照明器具やカーテン、カーペットなどもコーディネートできた。敷地は235.4m<sup>2</sup>なので、庭で四季折りの花を楽しむこともできる。たくさん咲いたかすみ草を近所の奥様方にお分けして喜ばれたりもした。執筆している今、5月中旬は庭一杯に赤や白のベルベナが群れ咲いている。赤、白、ピンクのモスフロックスも美しい。ピンクの牡丹は大きな花がたくさん咲いた。散ってしまうのが惜しめる。かわりにバラの蕾がたくさんふくらんで咲き初めている。藤原台のシンボルであるカリヨンは心よい音楽で時を告げてくれる。“まやの家”は同じ灘区の浜の方とは3℃は涼しいといわれるが、“藤原台の家”の夏も涼しく、風を通せば、ほとんどクーラーもいらぬ。夏の蒸し暑い日本で、涼しい夏を過ごせることはありがたい。しかし、北区の冬の寒さは格別で、勤め帰りの神戸電鉄で、吹きさらしの鈴蘭台や有馬口での乗り換え待ちの寒さには、ほとんど閉口してしまう。朝も家を出て神戸電鉄で長田までの途中、窓外を見ていると、菊水山あたりまでは土が凍てつい



応接室東面 “まやの家”設計図より

ているが、表六甲に出ると土も凍てていないし、日ざしも急に暖かくなる。年をとると、やはり表六甲が住み易いと思う。

私は勤務校で現在、住居学、住居設計、家庭科教育法を担当している。住居学は家政科全コースとも卒業に必修の科目で、前後期通した4単位の履習。住生活論、住居史、住居の現状と課題、諸外国の住居と環境、住宅の構造・設備、各室の機能、構成などについて指導している。住居設計では平家建木造住宅のトレース、標準家族向き2階建や3世代住宅などの自由設計で、平面画・立面図・断面図・透視図などを描かせている。ドラフターや平行定規も使用させている。家政科の授業科目としての指導であるが、卒業後建築事務所などの事務職として就職した者も多く、2級建築士になった人もいる。生活改良普及員の津名郡五色町のTさん(在学当時はAさん)は結婚後も続けて活躍している。住居に関して電話で質問してきたこともある。中学校の家庭科教諭や、小学校の家庭科専科教諭として就職している者もいるし、既に教職を辞めて結婚し、幸福な家庭の主婦となっている人もいる。学校の近くに住んでいるOさんは在学中、友人とカーペットの研究をし、生活科学(学生の研究発表誌)に掲載した。卒業後公務員として神戸市役所に勤めた。就職後間もないころ自転車で颯爽と出勤する彼女に出合った。駅まで自転車で通っているそうで張り切っていた。それぞれの個性を生かし、ま

じめに努力している教え子たち、私たち夫婦は既にセカンドライフであるが、若い人たちの前途が楽しみである。

私のうちにはシャム猫の母子2匹がいる。母猫は昭和56年8月、生後2ヶ月位のころ、獣医さんのところから来た。シャム猫だからシャー子と名付けた。勤めから帰ると、必ずとんで来て、抱いてくれとせがむ、私は抱き上げてやるが、夫はただ突っ立っているの猫の方から飛び上る。したがって、夫の背広やシャツは、みな胸の生地がけば立っている。シャー子は自分が外に出て帰ってきた時は、ミャーンと挨拶をしながらはいつてくる。子のフーちゃん(昭和61年9月20日生まれ)で、他の子より格別小さく、寒さに向って手離すに忍びず手許においた。母猫が甘やかして大きくなったからか、人には抱いてほしいと要求しない。「フーちゃん」と呼びかけるとミューと返事をする。何々するの? と尋ねると内容は分からないのにフーンと答える。母子とも、だまって人の膝の上に乗る。時には2匹が来ることもあって細い私の膝は超満員、後から来た方はあきらめることになる。仕事をしていると関心を持ってほしいのか机の上にあがって手許に座り込む。このように猫は私たちの家族のようなもので、毎日、朝と晩には餌をやらなければならない。その家に当分居ないと決めると、シャム猫2匹、シクラメンやシンビジュームなどの鉢植えもいっしょに自動車で大移動する。うちの猫たちは飼い主とは反対に、自動車で大移動することが大嫌い、乗っている間中、ニャーニャーと嫌がっているが止むを得ない。“まやの家”の周囲は昔からのおうちなので猫がうろうろしていても誰も気にされないから、お天気の良い日など2匹の猫は庭でよく遊ぶ。5m位あるメタセコイヤによじ上るのも好き。“藤原台の家”ではそうはいかない。隣の奥様も、裏のご主人も猫ざらいとか、庭に出す時は紐で繋いでおくので、猫としては楽しくない。結局、すぐ家へ入れることになる。猫にとってセカンドハウスは迷惑なことである。

## 昨日・今日・明日

初代部長 中川 侑子

兵庫県建築士会女性部会を設立して、5周年を迎えた。4年前に設立準備会を開いた頃のこと、最近のことのように思い出される。

その頃、問題となったのは、「技術者として、男女の差はないのに、なぜ女性部会が必要なのか」という質問だった。しかし、その内容を十分にいろんな視点から検討するのは、単純な作業ではない。

理論でなく、「男性中心の建築の分野で、女性技術者の集う場があれば、心強い」という素朴な希望で、親睦を中心とした会として、出発することにした。設立にあたって、男性会員の協力、事務局の応援は心強かった。

現代の女性の置かれている状況を反映して、会員の仕事とのかかわり方はさまざまである。フルタイムで勤務している人、フリーで自営の人、工務店の経営者、主婦が主な人等と、さまざまではあるが、どの人も建築の仕事が続けていこうと、建築士会に参加している。ここが共通の場として、活力のある会に成長すること、これが女性部会の役割ではないだろうか。

建築の分野は、生活者としての女性の視点が特に必要だと思うが、現実にはそうした視点を生かす場は少ない。女性技術者のネットワークが、そうした状況を少しでも変化させられないか、そうした幻想を抱いて、会員は参加してきていると思う。それが幻想ではなく、実現への道筋を発見していきたいと願い、部会活動を進めてきた。

「すまい・女の目」を発刊した後、会員は今まで30名前後だったのが、一挙に55名に増加した。やはり、困難であっても、力を合わせて事業をすることの大切さを、あらためて感じた。

部会活動として、月1回開く「住まいの研究会」を中心として、春の講演会、秋の見学会、パース講習会、模型講習会と多彩な活動を続けてきた。又、兵庫県より2年後に京都府にも女性部会が設立され、それ以後、一緒に見学会を行い、親睦を深めている。

5周年を迎え、今後の女性部会の課題は、新しい会員が士会活動に参加し、中心メンバーとして成長していくこと、そして今まで活躍していた人たちが、又、新しい場を創り出す必要があると思う。

「女縁が世の中を変える」上野千鶴子編によれば、今は女性のネットワークが花ざかりのようである。人生、80年になり、今後、豊かな生活を創り出すには、ますます友人の輪の大切なことを、多くの人が感じ始めている結果だと思う。

建築の分野をこえて、いろいろの分野の人たち、男性も含めて、新しいネットワークを今後、創り出せればと思う。又、そうした活動が、今後の士会活動の活性化の源になるだろう。

## 住まいの研究会の歩み

すまいの研究会世話人 木本 和子

住まいの研究会は女性部会の発足と同時に作った。そのきっかけは、女性部会らしい活動として建築・住居系の専門家の立場からすまいと生活の関係について女性の感性で見直し、あるべき姿を検討してみようと意見がまとまりできたものである。会合は月一回だが毎回10~15名参加し、テーマを決めて活発に活動している。

過去5年間のテーマを振り返ってみると、最初の2年間は住宅の各室論として、台所・居間・サニタリー等一回づつ担当の発表とfree talkingを行った。そのまとめは“すまい女の目”として出版できた。

3~4年目は日本も高齢化社会に突入しつつあり、“高齢化社会とすまい”をテーマに据えた。文献や新聞雑誌から全員協力して資料を集め、整理・保存した。中でも、老人ホームの見学を5ヶ所行い、各自感じるところを座談会として“集い”100号記念誌に発表したり、100名の高齢者にアンケートを行い、すまいに対する実態や希望を聞くことができたのは意義深い。

5年目の今年には住宅の質が昨今、高規格・高性能・居住面積拡大の傾向にある中で本当に住みやすい住宅を問う時期に来ていると思われ、更に研究を進めている。

## これからの「住まいの研究会」

すまいの研究会世話人 鈴木 洋子

住まいの研究会のメンバーの活動を見てみると、よくこれだけ「住まい」へのアプローチの仕方があるものと思う。これが住まいの研究会の財産であり、活動の源といえるのではないだろうか。仕事を持つものもまだ持たないものも、また、経験の深いものでも浅いものでも、どうかするとひとりよがりの考え方に陥りがちである。「女ならではの考え方」と自画自賛しているだけではつまらない。メンバーの多彩な活動を基に、「住まい」への問題意識を共有化して初めてひとつの力になるのではないかと思う。

63年度のテーマは「これからの住まい」。近代住宅史を振り返ったり、日本の風土とのかかわりを考えたり、これからのエネルギーを考えたり……。それぞれの立場を活かした切り口で、「これからの住まい」への課題について問題提起を始めている。更に、メンバー以外の職種の人から情報を得ることも計画中。「住まいの研究会」での蓄積が個人個人の仕事へ反映することだけで満足するのではなく、生活者の視点を持った建築技術者の提案としてまとめられることを目指したいものである。



## 女性部会員

63.11.15.現在

- ・名田 倭子 (明石)
- ・興津 久美 (淡路)
- ・河南 真美
- ・藤原 一美 (以上柏原)
- ・青石須雅子
- ・有村 桂子
- ・今井 桂子
- ・上原 柚子
- ・岡本 享子
- ☆●鍵野 洋子
- ・苅谷 君代
- ・河井智江子
- ・栗林 郁子
- ・河野 玉恵
- ・小西 文
- ・柴田まり子
- 白阪奈津子
- ・杉本 和子
- ・鈴木 洋子
- 高松 洋子
- ☆●武野 朋子
- ☆●田中 康代
- 垂水百合子
- ☆●内藤 玲子
- ☆●中川 俱子
- ・長瀬真理子
- ☆●永福より子
- 野崎 留美
- ・福江 順子
- ・藤田 昌
- 前野ふみゑ
- ・正木 恵子
- ・村上 玲子
- ・村田 純子 (以上神戸)
- ・池田垣理子 (三田)
- ・上山 寿子 (龍野)
- ・大坪 夏代
- ・久保 真澄
- ・田中千恵子 (以上豊岡)
- ・阿部 保代
- ・安藤 博子
- ・大都城千秋
- ・長部 幸子
- ・金津 容子
- ☆●木本 和子
- ・杉谷 正美
- 日高たか子 (以上阪神)
- ・本間 浩江
- ・八瀬 恵子 (以上姫路)
- ・浅野 悦子
- ・河合 尚子
- ・小林 保子
- ・山田奈代美 (以上 社)
- ・森本 康代
- ・河合 碧子 (以上賛助)



58年2月19日 女性部会発会式

■祝5周年！ はや、5年の月日が流れたのかと思うと、感無量であります。東京士会に「女性部会設立準備委員会」が出来ていると伺い、資料をいただいて、兵庫士会にも、それが、役立てればと、帰途についたことを思い出します。

女性部会を作るということに、《技術者として、男女区別はないのに》、というご意見もありましたが、良きリーダーにめぐまれ、部会員の積極的なご努力で、会は運営され、私も、事務局として、側面から設立、運営に助力させていただきましたことを、嬉しく思います。

武田 百合 (事務局)

### 5周年記念誌

昭和63年12月

発行 社団法人 兵庫県建築士会

〒650

神戸市中央区北長狭通5丁目5-18  
(林業会館内) TEL (078) 351-2800

編集 女性部会 5周年記念誌編集担当

印刷 福田印刷工業株式会社

TEL (078) 811-3131(代)

●印は役員  
( )内は支部名、  
☆印は5周年記念誌  
編集担当